

第6回「こども条例(仮)」を考える市民ワークショップ

【日時】 令和6年5月27日(月) 午後19時00分～21時00分

【場所】 市役所地下1階 市民ホール

【出席】 22名
市民15名(うち3名Zoom)、所管課1名、事務局6名

【概要】

令和6年度「こども基本法」に基づく市の「こども計画」の策定が必要となるなか、その前提として市議会から政策提言を受けた「こども条例(仮)」の整備について検討すべきと考え、市民の参画や関与を得て、より実効性ある取組みとするため、第6回ワークショップ(毎月1回程度開催を予定)を開催した。

【詳細】

1. 開会あいさつ(こども未来部長)

広報たかやま5月号で周知、「こども計画」の策定に向け忌憚ない意見を賜りたい。

2. 自己紹介(各自から氏名、所属団体など)

3. 資料説明～意見交換

・高山市の医療について(医療政策課長)

・こどもの意識等に関する調査の結果概要について(こども政策課長)

庁内でも検討したが、今年度の「こども条例」の整備は見送り、「こども計画」をより良い内容にすることに注力、「計画」において「条例整備を検討」と表現するなど今後調整したい。

このワークショップでは、「計画」策定においても基礎となる内容を取り上げてきており、引き続き、個別テーマや計画内容などについて、意見交換を実施していきたい。

今回はグループを分けず、Zoom参加者を含む全員による対話を行った。

次回第7回は、6月26日(水)同時刻、地下市民ホールで開催予定

意見のまとめは別紙のとおり

以上

<質問> ○参加メンバー、→医療政策課長

○各国保診療所の体制はどうか？（Dr.コトー診療所のようなイメージ）

→医師は基本1名で内科・外科ともに対応する。他に複数の看護師、事務員が勤務している（久々野は2名）

○市内の国保診療所で診る患者のうち、こどもの占める割合はどれくらいか？

→大多数は成人であり、こどもは少ないと認識（実数はこの場では不詳）

予防接種にも対応しているが、場合により、他の病院を紹介している

○「24時間ホットライン」、「救急安心センターぎふ」で電話相談に対応するのは誰か？

→医療の知識がある者で、原則、医師や看護師である

○今年度から、1か月児健診の助成が始まったが、自分としては、過去に自費で負担した記憶がない

→ほぼ全員が1か月児健診を受けており、これまで公費支援がなかったため、恐らく支払いをされたのでは

○1か月児健診の助成を始めた理由は？

→経済負担の軽減と早期の伴奏型支援の両面であり、この事業の開始により、医師から市へ連絡が入る機会が増え、病気や発達気になるこども、心配される家庭への早期介入につながっている

○このワークショップで出た意見は、どのように反映されるのか？

→市の「こども計画（仮称）」に役立てる

○医療関係の市の計画はあるか？

→医療関係での、市の独自の計画はない状況である

○医療分野における市と県との役割分担は？

→市域をまたぐ性格のため、基本は県で進めるべきものだが、市は何もしない訳でなく、今年度事業では、移動診療車の導入や寄附講座など、市にできる取組みを進めていきたい

<オンライン予約>

○混雑している医院が多いため、予約アプリの導入ができないかといった意見をよく聴くが、予約アプリなどの導入に向けては、どのような課題があるか？

→市内の各医院は混雑していると認識している

→各医院に聞き取りなどはしていないが、態勢的に余裕がなく、新たなシステム導入といったことが難しいのかもしれない。医師が高齢化するなかで、あと何年経営できるかなど踏まえると、コスト回収を不安視し、システム導入に踏み切れないといった面も考えられる

○予約制には良し悪しがあり、空き時間ができるため診察可能な人数が減り、結果として、診察を受けられなくなる恐れがある。順番待ちをすれば、確実に診てもらえる

○スムーズな医療の提供には、看護師の経験や能力が重要である

<医師の高齢化>

○全国的に、医師不足が深刻な問題になってきている。市内の医師の高齢化が進んでいると感じるが、市内の開業医の実態把握をしているか？

→詳しいデータは持ち合わせていないが、50代では若い方で、60～70代の医師が多い状況。今後10年位、年齢により続けられない医師が大きく増えていくのではと感じている（開業医には定年がないため、自身で決断された時が引退となる）

- 以前と比べ、小児科医の高齢化などにより、営業時間が短縮されていたり、診察の予約枠が埋まってしまっていることが多いと感じる。開業医に受診できないと総合病院に行かなければならず、初診料など負担が重くなるといった話を多く聞く
- 医師の高齢化を感じる人が多い
- 昔に自身のこどもが診てもらった医師が、まだ現役で診察をしてみえることに驚いており、医師の高齢化が改善できると良いと感じる（「地域枠」にも期待したい）

- 日赤病院や久美愛厚生病院の医師は、65歳で定年退職と聞いているため、定年後の医師に地域の医療に貢献してもらえると良いと感じる
- 市内の総合病院を退職した医師は、故郷や家族の暮らすまちへ転居される人が多いのではないかと
- 外科医はハードな勤務で職業としての寿命が短いため、65歳以降まで十分働けるかという問題がある
- 引退を考える開業医が、総合病院に勤めていた医師に病院施設を譲りたいといった意思を示され、独立開業するケースもある。総合病院に勤める医師は代診医として各医院で診察することがあり、関係ができることにより、そういった事例にも繋がる

<各地域の現状>

- 市内でお産のできる病院が少なくなっている
- 医師会に加わらない医師もみえるようで、医師会がこの先も継続するのかといった問題もある
- 新型コロナなども含めてこどもが体調不良になると、すぐに医者に診てもらいたい、予約が取れないため受診できない、一晩様子を見たが、熱が上がり入院に至るといった話も聴いている（母親の状態など、すぐに医者に診せることができない事情があるのかもしれない）

- 久々野診療所を利用するが、こどもの患者とは、ほぼ一緒になったことがない（予防接種のために親子が来ていることはある）。待ち時間も短く、それほど不都合を感じていない。専門的なことは総合病院を紹介してもらうなど、受けられる医療サービスとして満足している
- 将来的には、診療所医師は自身の診療所だけでなく、エリア内の複数の診療所でも診察できるような連携体制を考えていきたい
- 休日診療所は、医師会の協力による当番制により対応している

- 栃尾にも診療所はあるが、上宝の本郷地区では、距離的に近い神岡町の飛騨市民病院を利用することが多い。水曜日は医師が病院にみえないため、1日様子を見ることもある

- 飛騨地域の住民は、医者にかかることを躊躇する人が多いと聞いたことがある。心の病いや生理痛など、できれば診てもらいたい場合も、急性期医療を受けるのと同じような感覚で、病院に行くという選択をしないのではないかと
- 金銭的な問題や移動手段がなかったりすることにより、病院へ行けない人もみえる

<開業医に対する支援>

- 開業医に対する支援は考えられないか、検討にあたってはどんなことが課題となるか？
- 現在、市からの特別の支援はない状況である
- 医院を続けるにはある程度の患者が必要（医師も事業主）であり、これまで支援を受けずに経営努力により運営している医院があるなか、新規参入する医院のみへ市が支援するといったことは理解が得られないのではないかと

○高山市のこどもが、飛騨市にある児童精神科医のクリニックに多く通っていると聞いている。飛騨市では市直営で運営されており、近隣の自治体では公費により地域医療を確保されていると聞いているため、人口減少により必要な医療が確保できない時代となるなら、医師を誘致するような市の施策があっても良いと感じる

→大きな枠のなかで、開業医への支援も考えていきたい。医療は市町村の枠を超えた政策であるため、県が医師の采配など舵取りを担っているが、医師不足により、飛騨地域では特に手薄な状況となっている。単独の市町村のみでは解決できない課題であることもご理解いただきたい

○域内で医院を開業するなら財政支援するといった自治体もある

○開業医に対する支援など、市町村が活用できるような国や県による支援メニュー、財源はあるか？

→情報収集していきたい

<地域への定着>

○研修医は地域イベントへの参加やコミュニティとのつながりにより、愛着を持って地域に定着してくれることがあるため、そういった機会を作っていくことも有効である

○市内には単身赴任の開業医もみえるため、結婚したからといってあきらめる必要は無い

○飛騨地域では、今後、医師不足がさらに深刻となるため、様々な対策が必要と感じる。自身の活動の一環として、地域と子育て中の親子を結びつける取組み（交流会）を定期開催している。医師、理学療法士、足の専門家など専門職に参加いただき、病院へ行くほどではないが聞いてみたいことなど車座になって様々な話をしている

○若い医師のキャリア形成を支えていく必要があり、育てる立場の医師が高山に十分居るのか心配される。赴任した医師などを、できるだけ当地に引き留められると良い

→若い医師へのアプローチは重要と考えており、今年度から始めた「寄附講座」もその一つである

→「地域枠」により圏域での従事を求められる期間にも限りがあるため、期間が過ぎた後も、地域に定着してもらえる取組みについては、様々に考えていきたい

<その他の意見など>

○自身の託児関係の活動において、「病児、病後児を預かってほしい」との意見を多く聴いており、今後、受入れできるような態勢を整えていきたい

○「病児保育室」で勤務していたが、当日の朝、予約内容が変更されることも多く、スタッフ配置も難しかった。仕事本位にならず、家族がサポートできることが一番良いと感じる

○飛騨地域におけるこどもの健康上の課題（糖尿病、肥満関係の数値が悪い）があり、飛騨地方の食文化、親の生活習慣の影響も大きい。「こども計画」には、こどもの食生活の改善なども掲げる必要があるのではないかと

○耳の聞こえが悪い（難聴）児の対応について、もう少し努力をお願いしたい。治療や補聴器の調整などで岐阜市へ通うなど負担が重いといった話を聴いている

以上